

# ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

太 田 義 弘

1. はじめに
2. システムの構成要因とプロセス展開
3. プロセス展開とクライエント・システム
4. プロセスの局面展開
5. クライエント・システムのアセスメントとその指標及び因子
6. おわりに

## 1. はじめに

本論考は、過去5年にわたってソーシャル・ワーク実践プロセス研究として、日本社会福祉学会において逐次継続報告をしてきた成果の一部をさらに前進展開させたものである。かねてよりソーシャル・ワーク実践の科学的、効果的な展開に多大の関心をもっていたのであるが、それは援助者側の恣意的な活動ではなくて、クライエント中心的視点をいかにそこで反映してゆくかという課題の積み上げでもある。ソーシャル・ワーク実践とは、この特殊な状況に生活するクライエントを援助し、再生させる営みであり、それを可能にする行動である。この実践を科学的に考察することは、援助者としてかかわるプロセスを研究すること以外に適切な方法はない。換言すればソーシャル・ワーク実践研究とは、プロセス研究に外ならない。

しかしプロセス研究は、簡単な手法によって可能になるものではない。かつては援助技術の展開段階をプロセスと称して、この手順を意図的に展開できるソーシャル・ワーカーを有能な専門職業者と考えてきた。理論をクライエントの現実に投影した技法によってプロセスが展開される

のではなく、むしろクライエントの実存にかかわろうとするソーシャル・ワーカーとの出会いが、プロセスを形成してゆくものなのである。プロセス理解の前提をこのように自覚しながら、人間の生活という営みを生態学的に見ると同時に、その生きざまを統合的に分析する視点としてシステム概念を駆使することにより、難解なプロセス研究を前進させることができ可能になってきた。

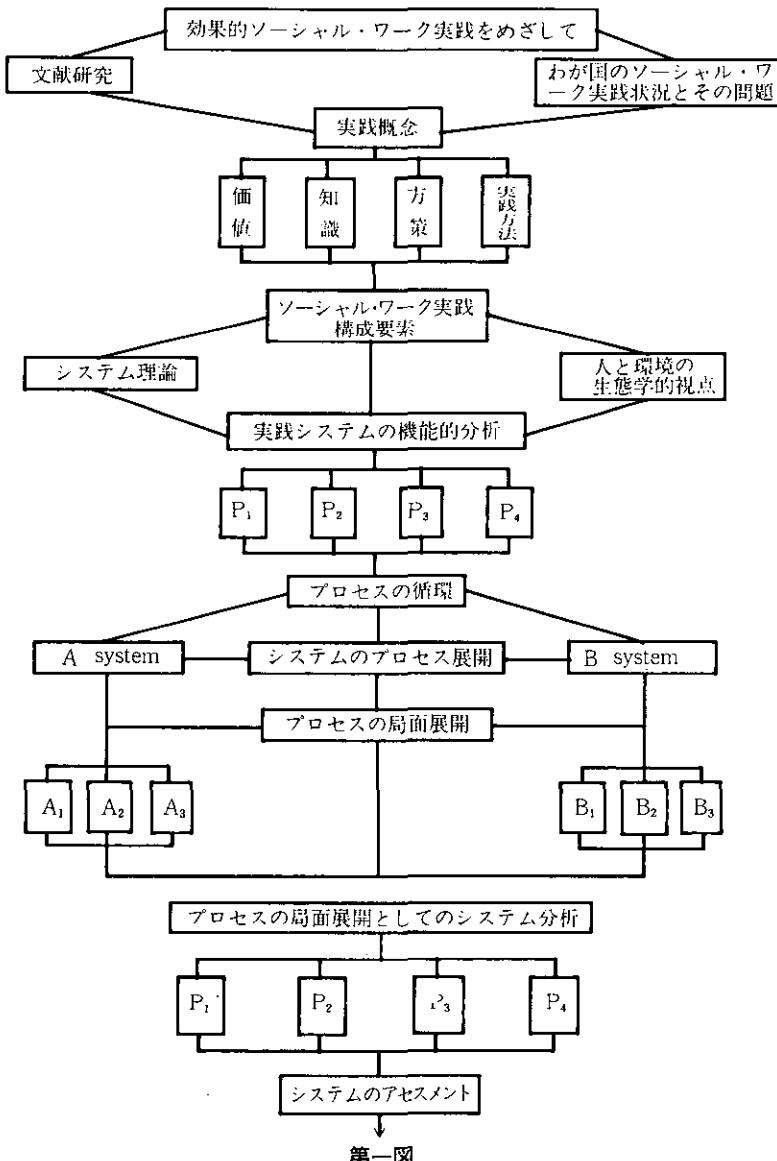
本研究の前提になる積み上げてきたプロセス研究の足跡をここで詳細に解説する余裕はないが、フローチャートとしてその流れを第1図（次頁）のごとくまとめることができる。それぞれの項目については、次のような順序で一応の考察を深めてきたつもりである。

ソーシャル・ワーク実践の科学的展開を目標に、実践の基本的概念と構成要素<sup>(1)</sup>から、生態学的視点を強調したシステム概念展開としての実践システムの機能的分析、<sup>(2)</sup>さらにシステムのプロセス展開よりプロセスの局面展開<sup>(3)</sup>へと実践プロセス研究を進めてきた。制度としての社会福祉、つまりハード・アプローチの構成と活性化をどのようにすすめてゆくことが可能なのか、そして一方ではクライエント自身への援助をいかに有效地に展開することが可能なのかを考察してきた。特にこのソフト・アプローチが主としてソーシャル・ワークと呼ばれてきたわけであるが、実践活動とは、本来その両面をプロセスとして内包していなければならないものである。これらをプロセスの二面性として、援助過程と実践・政策調整過程とに分類して分析してきた。そしてそのプロセスは相互にフィードバックされて循環しながらシステムとして機能してゆくと考えられる。<sup>(4)</sup> そのプロセスがP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4システム段階を追って展開されること、さらにその展開を充実に分析する作業として局面展開を試みてきた<sup>(5)</sup>つもりである。

以上のような作業から、今回は、それらのシステムとしてのプロセスを構成する共通要素にしたがい、各システムのもつ特性の分析を試みてみたい。この目的は、システムの相互依存関係やシステムのプロセス展開といったシステムとしての全体像を機能的に分析し追求してきた考察から、視点を変えて構成システムの内面を考察しようとするものである。この目的を追求するために、特に今回はクライエント・システムに焦点を絞って考察を深めたい。その理由は、ソーシャル・ワーク実践の焦点

ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

ソーシャル・ワーク実践プロセス研究のフローチャート



第一図

がクライエント援助にあるからである。循環プロセスとして二分類された援助過程と実践・政策調整過程も、一方はクライエントに最適の援助をするためにクライエント・システムの分析追求が必要であり、他方はクライエント・システムの現実を直視することから実践活動システム、行政システムの在り方を再検討してみることになるからである。いずれにしてもクライエント・システムの分析が基礎的条件だといえる。

## 2. システムの構成要因とプロセス展開

このことについては、すでに前述の論文などにおいて述べてきた<sup>(6)</sup>ところではあるが、プロセスとしてのクライエント・システムを分析するということでは、再度そのシステム関係を明確にしておく必要がある。次の表はそれを整理したものである。

実践活動としてのプロセスへのアプローチ

形態 分析	外的形態分析	内容分析
構 造	4システム分類 ↓ 循環概念 ↓ 中心的システム	システムとしてのクライエントと生活 ↓ 構成要因 ↓ 指標と因子
機 能	4システムの機能 ↓ プロセス展開の特性 ↓ フィードバックと均衡調整機能	クライエント・システムの特性 ↓ プロセスの局面展開 ↓ 循環機能としてのアセスメント

第一表

これによるとプロセス研究へのアプローチには二段階があるわけで、第一は、マクロ的視点よりのシステム分類とその相互関係という外的形態についての構造とその機能の分析、第二が、プロセス構成システムの

## ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

各内容についての構造機能分析とである。これまでの考察は、その第一点を中心にして進めてきたものである。それは各システムが、独自な運動をしながら機能を発揮し、その成果が、他のシステムに連動してゆくシステム間の変容プロセスに、焦点化して考察をしてきた。ここで再びこれまでのプロセス研究のまとめをしながら、今回のクライエント・システムの分析をすることとの関連と意義を明確にしておきたい。

まずプロセスを  $P_1$ : 政策策定システム,  $P_2$ : 行政システム,  $P_3$ : 実践活動システム,  $P_4$ : クライエント・システムへ向っての展開プロセスと考える A system, つまり援助過程とその逆循環  $P_4 \rightarrow P_3 \rightarrow P_2 \rightarrow P_1$  へと向う B system, つまり実践・政策調整過程とに二分してきた。

(1) A system は、クライエントの生活援助に焦点化したプロセスで、そのために国政レベルでの政策策定から、地方自治体ないしは地域レベルでの行政活動へ、そして第一線機関としての実践活動へとクライエント中心的援助を、システムとしての段階を追いながら系統的に展開する目的をもったプロセスである。そのプロセスは、第二表のごとく、各システム間の  $A_1 \rightarrow A_2 \rightarrow A_3$  過程の積み上げから成り立っている。①  $A_1$  過程：行政政策展開過程とは、 $P_1 \cdot P_2$  間のプロセスとして、福祉国家における社会福祉政策の目標を検討しながら、その姿勢を行政にどのように反映してゆくのかというプロセスである。②  $A_2$  過程：実践活動推進過程は、それを受けた  $P_2 \cdot P_3$  間のプロセスで、行政レベルにおける政策としての実践プログラムを、ソーシャル・ワーク実践機関においてどのように具体化してゆくのかというプロセスである。そして③  $A_3$  過程：クライエント援助実践過程が、 $P_3 \cdot P_4$  システム間における狭義の援助活動として、実践機関のもつ機能を最大限に発揮して、クライエントとその生活を援助してゆくプロセスである。

(2) B system は、クライエント中心的視点を強調しつつ、クライエントとその生活援助活動の客観的条件を整備することに焦点化されたプロセスで、クライエント援助を通じて積み上げられた課題を逆循環させ、実践活動、行政、政策策定システムとその機能を再検討するためにフィードバックさせてゆくプロセスである。これについては、第三表のごとく、各システム間の  $B_1 \rightarrow B_2 \rightarrow B_3$  過程の積み上げからなっている。まず①  $B_1$  過程：実践活動調整過程として、 $P_4 \cdot P_3$  システム間のプロセスで、

## システムの構成とプロセス展開

## (1) A system: 援助過程

プロセス 構成	A system-A <sub>1</sub> 行政政策展開過程	A <sub>2</sub> 実践活動推進過程	A <sub>3</sub> クライエント援助実践過程
目標	福祉国家としての政策目標の検討とそれの地方行政システムよりの検討	実践活動システムを通じて政策に基づく行政目標の検討と評価	実践目標のクライエント中心的視点よりの改善充実とその評価
制度	社会福祉諸制度の検討とそれの地方行政システムよりの展開と改善	実践活動システムよりの行政プログラムの検討と評価	クライエント援助への目標、実践プログラムの改善検討とその評価
組織	政策策定と実践をめぐる組織機構の評価とそれに基づく機構の改善、活性化と充実	実践のための行政機構の検討と実践機関での組織機構の活性化	クライエント中心的援助体制の充実と展開
方法	政策内容の行政システムからの充実改善と展開の評価	政策目標の具体化をめぐる管理運営方法の改善と評価	クライエント援助への実践機関としての組織的、総合的対応方法の検討と展開
展開	政策展開方法の地方行政システムよりの改善と評価	活動展開方法についての実践活動システムよりの計画化とその評価	クライエント・システムに対応した実践活動の検討と展開
機能	政策目標と目標実現過程の地方レベルでの機能評価	政策目標の地域特性に基づいた実践機能の検討と評価	実践機関の援助機能の効果的展開とその検討及び評価
財政	政策目標に対する国家予算と福祉充実計画に基づく予算配分の評価	行政目標実現のための予算とそれに裏付けられた実践活動の評価	クライエント援助への財政基盤の検討と充実計画への予算配分

第二表

ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

システムの構成とプロセス展開

(2) B system: 実践・政策調整過程

プロセス 構成	B system-B <sub>1</sub> 実践活動調整過程	→ B <sub>2</sub> 行政活動調整過程	→ B <sub>3</sub> 行政政策調整過程
目標	クライエント理解に基づく実践活動と機関の援助目標の再検討	クライエント援助に対応した実践機関の目標実現のために行政目標の再検討	住民生活や地域特性を反映統合した政策目標の検討と確立
制度	適正なクライエント援助のために制度や実践機関のプログラムの検討と再編成	実践活動システムより地域特性を反映した行政プログラムの検討	住民や地方行政システムよりの要求を政策目標に具体化した制度の充実と具現化
組織	クライエント援助とソーシャル・ワーカーのための適正な組織機構の検討と改善	実践活動システムを反映した行政組織機構計画の確立と実施	政策策定機構の検討と住民要求反映機構の活性化と改善
方法	クライエントへの援助方法の検討と実践活動を通じての方法の再検討	特徴ある実践活動を支えるために適切な行政活動方策の検討と実施	地域特性を反映した政策策定方法や内容の検討と改善
展開	クライエントの現実に即応できる柔軟な援助展開体制の確立	適切な実践活動を可能にする行政システムの展開計画の策定と実施	政策内容の展開過程を行政システムを通じて検討改善
機能	実践機関の機能の検討を通じ必要即応、積極的臨機応変な対応機能の展開	実践活動システムの指導機能と政策策定への参画機能の検討と実施	行政システムより政策改善機能の評価と推進
財政	予算措置の検討と有効なプログラム展開への予算配分の再検討	地域特性に根ざした実践活動を可能にする行政予算の多角的検討	地方行政要求に基づいた国家予算における福祉予算の検討と政策的配分

第三表

クライエントの生活要求に対する実践機関のプログラムやアドミニストレーション、サービス機構などの再検討と改善を目標にしたプロセスである。②  $B_2$ 過程：行政活動調整過程は、 $P_3 \cdot P_2$ システム間プロセスで、特徴ある実践機関が、十分にその機能を遂行できるように、その課題を行政システムに反映し、行政機能を再検討し、行政システムをクライエント中心的に構成してゆくプロセスである。そしてもう一つ③  $B_3$ 過程：行政政策調整過程は、 $P_2 \cdot P_1$ システム間プロセスとして、行政に反映されている地域特性に対応した政策展開が可能になるように、国政レベルでの緻密な政策策定を可能にする実践活動の積み上げと反映のプロセスとである。

これらの運動をプロセスを通じて、どのような機会に、どのような方法で展開することが可能なのか、特にわが国のような官僚機構と行政組織、職業制度という現実の中で、政治運動や市民運動とは別に、ソーシャル・ワーク実践活動の重大な機能として、これを展開するには各システム間の理解や協同が必要なことはいうまでもない。これらについてもいずれ言及してゆきたいと考えている。

システムのプロセス展開の生態的特徴を明確にするために、これをさらに7視点より分析してきた。これは形態や規模、構成から機能までが異なる4システムを分析し、その特徴を峻別するのに共通するシステムの構成要因と考えられるものである。要因配列のカテゴリーとしては、心理的、社会的、経済的側面からの視点が混在し、価値観のような抽象的要因があるかと思えば、他方では具体的な事実を要因として評価する部分があるといった問題がないわけではない。しかし最大の課題は、システムの分析要因に論理的整合性を与えることが目的ではなく、システムという生態的概念を駆使して、あるシステムのもつアイデンティティをいかに適正に表現するかということにあるからである。

このような観点から7要因、目標、制度、組織、方法、展開、機能、財政を分類指摘することになる。「目標」については、システムの価値的・心理的要因を表すことになるであろうし、「制度」と「組織」は、システムの構造を表す静態的・社会的要因である。「方法」、「展開」と「機能」は、システム構造のもつ動態的・社会的要因を評価しようとするねらいをもっている。そして「財政」が、システムを機能させる経済的要因と

## ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

して指摘できるものである。

実践プロセスのシステム展開を構成要因別に考察したのが、第二表と第三表とである。

### 3. プロセス展開とクライエント・システム

プロセスという概念を単にクライエント処遇の方法として理解するのではなく、ソーシャル・ワーク実践そのものとして位置づけ、その実践活動をシステムの連動、均衡、循環という生態的視点から、その展開を考察してきた。これが前述してきたようにプロセス研究の第一段階である。

次に考察しなければならない第二段階の課題は、実践活動としてのプロセスを構成している各システムの内容についてである。これはまた遠大な研究を必要とすることになるが、政策策定機構や策定過程の分析や評価、行政機構の分析とプログラム・マネージメント過程の評価、実践機関においては、援助機構とそのアドミニストレーションなど課題は山積している。わけても当面この研究において急を要する課題は、今一つ残されているクライエント・システムの分析である。前述のごとく実践プロセスは、システムを循環しながらもクライエント・システムを出発点とすると同時に、目標点にもしている。これはソーシャル・ワーク実践が担う基本的態度であるが、クライエント中心的視点を堅持した価値の具体化でもある。もちろん別な観点から行政やそのサービスの効率効果を主目標にしたアプローチがないわけでもないが、実践プロセスの研究が最終的に意図するものは、そのようなものではない。この視点、システム構成とプロセス展開の内容に詳細に表現し解説してきたところである。

本考察の今回の試みは、実践プロセスの展開を構成するシステムの最先端を分析することになる。それはまたミクロ的プロセス研究の最大の課題でもある。それは A system が、援助過程として機能を展開する背景には、A<sub>1</sub>過程：行政政策展開過程があり、その目標は、福祉国家の名にふさわしい政策策定、行政展開をすることにあると考えられるが、しかしそれらはソーシャル・ワーク実践にとっての手段であって目標では

ない。その最終目的は、最先端システムにどのような成果が期待できるかということ、換言すればクライエントの課題解決、変容、成長、さらには国民の社会福祉の維持向上をいかに実現するかということである。このプロセスは、このように最先端システムでの成果を通じてはじめて評価されるものである。

A<sub>2</sub>過程：実践活動推進過程にしても、行政システムの期待することをクライエント・システムに社会福祉サービスとして忠実に伝達をするという発想ではなく、地域特性を内包した行政プログラムを、いかにクライエントや地域住民の現実に向けて具体化するかというプロセスであり、A<sub>3</sub>過程：クライエント援助実践過程も、いうまでもなくクライエントへの直接的援助そのものである。いかに実践にとってクライエント援助が、中心的課題であるのかが理解できよう。

一方 B system についても、それが実践・政策調整過程として機能することは、ミクロからマクロへのシステム、すなわちB<sub>1</sub>→B<sub>2</sub>→B<sub>3</sub>過程へと、各システム段階において、システムの再編成や均衡などの独自な調整作用を微妙に果すことになるが、しかしそれ自体が単一目標として焦点化されるものではない。むしろプロセス展開として実践活動に循環され、クライエント援助に焦点化される統合的機能に意義がある。間接的援助機能という表現で分類することもできるが、クライエント援助という発想が、人間と環境を統合的に生活概念としてとらえ援助することを意味することから、直接・間接という機能の軽重で理解すべきプロセスではない。元来システム概念は、直接・間接、正・負、順・逆といった役割の主従、軽重関係を表わす概念ではなく、それぞれのシステムは、その機能として、プロセス全体の営みについて重大不可欠な働きを同時平行的に担っている。ここでもクライエントの生活援助への目的に対して、このプロセスは援助の具体的条件整備として重大な機能を担っていることになる。

ソーシャル・ワーク実践にとってなぜクライエント・システムが焦点になるのか、そしてそのためのシステム連関を克明に考察してきた。次にこのクライエント・システムの内容を分析する必要がある。そこでこの目標を追求するために、まずクライエント・システムの構造を把握しておかねばならない。この構造分析については、実践プロセスの構造分

## ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

析に用いた前述の 7 構成要因をそのまま活用して分析をしてみたい。つまりクライエントをシステムとして生態的にとらえるということでは、そこに必要な構成要因が共通して内包されていると考えるからである。さらに換言すると、実践というプロセス展開も人間の社会的行為であり、クライエントの生活もまた共通なシステム概念によって分析される社会的行為だからである。

クライエント・システムを 7 構成要因から分析する場合に、明確にしておかねばならないことは、分析の目的が、クライエントの生活状況を静態的に理解する分析のための分析ではなく、生活を実践プロセスとして動態的にシステム理解をしてゆく必要があるということである。そこでクライエント・システム自体を生態的プロセス概念でとらえてゆかねばならない。システムの空間系列として構成要因で分析をする一方、時間系列からもプロセスを援助活動の局面展開として動態的に分析をする必要がある。

プロセスの局面展開ということでは、前述論文にて、システム間プロセス A<sub>1</sub>……B<sub>3</sub>までの 6 場面を、空間系列を 7 要因とし、時間系列をプロセスの局面展開として 5 段階に分析分類し、その機能をそこで果される活動として論じてきた。<sup>(7)</sup> この局面展開概念について今少し補足を加えた言及をしておかねばならない。一般にプロセスとは、A:過程でのソーシャル・ワーカーの援助活動を意味してきた。そのかかわり方をめぐって診断主義・機能主義論争から、今日の多様化したアプローチまで、換言すればプロセス認識と理解をめぐる異論が、それを生み出してきたわけである。ところが近年、インターベンション概念、短期処遇、行動変容などのモデルや理論が、時代的社會的要請を受けて台頭するに及び、プロセス展開のパターンは局面を追ってかなり意図的、計画的、積極的に展開される傾向が一般化してきた。ソーシャル・ワーク実践への総合的基礎理論を提示してきたサイポリーン M. Siporin,<sup>(8)</sup> 実践モデルと展開方法に焦点を置いたピンカスとミナハン A. Pincus and A. Minahan,<sup>(9)</sup> プロセス研究ということではコンプトンとギャラウェイ B. R. Compton and B. Galaway,<sup>(10)</sup> 実践の中心概念としてのインターベンション概念を強調しているローエンバーグ F. M. Loewenberg,<sup>(11)</sup> 精神分析学的視点の再評価を主張し臨床的ソーシャル・ワークの確立を提唱するストリー

ン H. S. Streat<sup>(12)</sup>などに見られるプロセスの局面展開には、分類や強調点に多少の差異はあるものの、一定の共通した局面展開モデルがある。これらの簡単な紹介と、そしてそれらをまとめた本考察の原型になる局面展開モデル<sup>(13)</sup>の紹介をしてきたが、この点を後ほど少し掘り下げてみたい。

それは、I 問題の把握と認識、II データ収集とアセスメント、III 計画化、IV インターベンション、V 評価の5段階である。局面展開とは、このような特徴をもったプロセスの展開というわけである。クライエント・システムを通じてインプットされたデータが、各システムでコントロール・プロセスとしての局面展開を経て、クライエント・システムに目標としての援助をアウトプットし、その評価がまたフィードバックされて、各システムでの機能を統合化し、実践活動を再構成してゆくことになる。入力されたデータが、時間系列を経てシステムを機能しながら移動するが、その移動の経路とその内容が局面ということになる。局面展開とは、システムがプロセスとして展開機能をする詳細な経路とその内容を意味しているといえよう。したがって局面展開という概念もまたプロセスとして循環する機能をもっている。

さて本章の主目的にもどって、クライエント・システムを分析することは、A<sub>3</sub>過程：クライエント援助実践過程を展開するために、第I局面から第II局面へとプロセス展開することを意味すると同時に、今一つB<sub>1</sub>過程：実践活動調整過程へのデータ提供という意味ももっている。ソーシャル・ワーク実践を目ざし構成されている各システムを、稼働させるためにもクライエント・システムの分析は、その出発点であるといわねばならない。

#### 4. プロセスの局面展開

次にプロセスの局面展開をめぐり、おのののの局面について少し触れておきたい。

まず第I局面一問題の把握と認識とは、いわゆるインテークと一般的に呼ばれてきた段階であり、援助的サービスが有効に機能し活用されるように働きかける媒介的、弁護的機能の必要性が、求められる局面であ

## ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

る。潜在的クライエント（アプリカント）への接近、問題や要求の評価をし、それへの対応の可能性を検討すること、<sup>(14)</sup> クライエントとして問題解決に取り組むに十分な動機付をすること、<sup>(15)</sup> 提供できる専門的援助とその関係の解説と理解を深めること、<sup>(16)</sup> 抵抗を解き、クライエントとしての協力的、積極的関係の樹立をすること、<sup>(17)</sup> 相互理解のもとに援助関係をめぐっての契約を確立しておくこと、<sup>(18)</sup> そして問題解決のためにクライエントの役割を引き出してゆくこと<sup>(19)</sup> とサイポーリンは、それを説明している。ピンカスらは、問題の認識を初期局面と考え、問題のアセスメントとデータ収集を、初期局面でのプロセス展開技法として分類<sup>(20)</sup>しているし、またローエンバークは、問題認識と援助の要請をこの局面に該当するものとして分類<sup>(21)</sup>している。

主として、(1) インテークと、(2) 契約を含めた局面であるといえよう。インテークとして、① アプリカントへの接近、② 問題、パーソナリティ、状況の概要把握、③ 要求への対応の考察、④ ソーシャル・ワーカーと施設の機能やサービスの解説、⑤ 取り扱いの可能性の検討、⑥ 協力関係の樹立、⑦ 援助サービスの計画と契約概念の解説、⑧ クライエントの役割遂行と動機付のプロセスである。契約ということでは、① アプリカントからクライエントへの条件の確立、② クライエントの役割と責任の明確化、③ 援助方法の解説と協同参加、④ 具体的契約関係の樹立、⑤ 契約に基づくプロセス展開ということになる。

第II局面—データ収集とアセスメントについて、これが本格的なクライエント・システムへの掘り下げたアプローチということになる。かつての医学モデルの診断概念より広範な事実関係の認識をする過程で、結果を立証する価値判断や、問題や状況の類型化をすることではなく、プロセスへの情報提供をすることである。ピンカスらは、アセスメントを問題への対応に限定して、そのためのデータ収集とともに、むしろ初期局面でのプロセス展開の基礎的実践技法として理解し、<sup>(22)</sup> その内容、つまり目標や機能、効果などには、あまり言及していないが、ストリーンは、精神分析学的な診断主義の伝統を余韻として感じさせるクライエントの問題、パーソナリティ、状況へのアセスメントの必要性を、プロセスの中での最重要局面として強調している。<sup>(23)</sup> そしてアセスメントを基点にして、インターベンションのための計画を系統的に組立て、実践を

プロセスとして組織化している。サイポーリンもアセスメントを重視している人物の一人である。診断と峻別しながら、プロセスとしてのアセスメントの意義と内容<sup>(24)</sup>、それとさらに問題の記述、パーソナリティ、家族や社会システム、状況についてのアセスメント、そしてそれらの統合的定式化へと進めている。<sup>(25)</sup> これらはまだ理論的考察の段階ではあるが、指標化に向けての諸方法の検討<sup>(26)</sup>やそのためのデータ収集項目を、生活状況調査 social study として克明に分類検討している。<sup>(27)</sup> コンプトンらもこの点については、三大分類される局面の一つ、初期接触局面の最大課題としてアセスメントの内容を、プロセス展開とその構成特徴に対応して提示し、詳細な項目に分類整理し、それに分析検討を加えている。<sup>(28)</sup>

アセスメントをどのように理解し位置づけるか、そこには異論のあるところである。その概念、特性、目標、効果、側面については、すでに述べてきた<sup>(29)</sup>ところであるが、再度まとめとして、「アセスメントとは、ある事例の生成過程、要因の構成状態、そのシステムを理解することへの情報の系統的提供を目的とした認識過程である」<sup>(30)</sup>と概念を指摘しておき、その内容については、次章にて解説することにしたい。

**第III局面—計画化**、これもまたプロセスとして位置づけられる局面である。アセスメントについての詳細な研究が前進しているのに対して、この局面の研究は、その重要性にもかかわらず、意義を強調するだけで、内容に言及した文献も少ない。ローエンバーグ、ピンカスとミナハンなどは、アセスメントとしての正確な情報収集に重点を置き、その分析から、インターベンションを直接に志向しており、そこに改めて計画化局面を介在させることをしていない。正確克明なアセスメントを前提にすると、計画化は不必要であるとも考えられるが、むしろそれらを前提にして実践プロセスの展開を、計画化として予見することが、いかに困難かを物語っているといえよう。

ストリーンのモデルでは、計画化とは、第IV局面インターベンション展開のプランニングを意味しており、プロセスとしてのクライエントへのアプローチ技法の展開計画<sup>(31)</sup>と理解できる局面で、限定された内容の計画化局面である。コンプトンらの考察は、特に詳細な検討をえたものではないが、実現可能な目標、提供するサービス、変容状況の焦点、ソーシャル・ワーカーの役割、クライエントを阻害する内・外要因、計

画実施に必要とされる知識や技法の焦点化過程である<sup>(32)</sup>としている。換言すれば、このプランニング過程はインターベンションに向けたクライエントとソーシャル・ワーカーの相互指針としての行動計画過程である<sup>(33)</sup>ともいえる。

計画化局面について、克明な考察を加えているのは、サイボーリンである。プランニングとは、目標達成のための行動選択を慎重かつ合理的に遂行する過程<sup>(34)</sup>であって、そこには三つのレベルでの目標を目指した意思決定過程がある。政策策定、プログラム計画とその実践計画である。<sup>(35)</sup> 計画と予診及び予見との関係を解説しながら、アセスメントからインターベンション局面への導入プロセスとして計画化局面を重視している。計画化の内容としては、目的、目標点、課題と焦点を分類し、<sup>(36)</sup> クライエントへの援助計画とインターベンション・システムの組織化計画のミクロとマクロ二側面より、プランニング過程の条件、構成、問題を検討している。<sup>(37)</sup> このようにプランニングとは、「特定の社会的目標達成のために、調査、検討、決定する相互作用過程を通じて、組織的にそのプログラムを構成すること」<sup>(38)</sup>であり、援助過程と実践・政策調整過程との両側面で、この局面展開は必要とされるものである。<sup>(39)</sup> その他プランニングをめぐる諸問題については、同論文<sup>(40)</sup>を参考願いたい。

第IV局面—インターベンション、この局面は、実践活動の特性をもつともよく象徴するプロセスである。簡単にその特徴を解説することは困難であるが、インターベンションという用語は、同様のニュアンスをこめながら、広狭二義に理解されている。広義には、あらゆるレベル（個人、集団、近隣、コミュニティ、全体社会システム）でのソーシャル・ワーク実践を意味する一般的な用語として、特にクライエントとソーシャル・ワーカーとの積極的、意図的、計画的な参加<sup>(41)</sup>を強調した概念として、狭義には、目標達成のためにソーシャル・ワーカーが、展開する特異な有効かつ計画的行為の方法と過程からなる援助レパートリーの活用<sup>(42)</sup>として理解されている。もちろんここで意図的に用いるのは後者の意味においてである。

この局面をピンカスとミナハン、ローエンバーグらは、インターベンションという表現を用いずに、初期接触、契約交渉、行動（援助）システム構成、<sup>(43)</sup> 目標追求方策の展開、契約交渉、目標追求方策の実施<sup>(44)</sup>と

それぞれ特徴的な表現を用いて、この局面を説明している。さらにコンプトンらも、活動局面という用語を用いて、この局面を特徴づけているが、そこでのソーシャル・ワーカーの働きをインターベンション的役割 *interventive roles<sup>(45)</sup>* と表現して、この局面を強調している。

ストリーンは、プロセスとしてのインターベンション局面を強調しながら、インターベンション計画の実践として、この局面を位置づけている。インターベンションとは、人と状況との全体像の中から変容を引き出すように意図された実践者によって用いられる行為<sup>(46)</sup>であるとして、クライエントとソーシャル・ワーカー関係の局面を経た積極的展開に限定して、この概念を用いている。

サイポーリンも、前述のごとくかつての医学モデルの治療に対応するプロセスとして、この局面を限定的にとらえながら、その展開を考察してきている。インターベンションを変容プロセス概念として理解し、系統的にしかも多元的にその活動を内容分析している。ソーシャル・ワーカーの影響力、クライエントの内的資源開発を通じての援助、特に注目されるのは状況へのインターベンションで、個人の内的条件から環境的条件まで状況への積極的援助<sup>(47)</sup>を重視した視点、社会福祉資源の拡充、それらのシステム機能の充実や改善<sup>(48)</sup>などクライエントへのインターベンションに焦点化しながらも、広く状況要因への働きかけを強調している。

インターベンションという概念を、単なる実践の積極的理念や姿勢として理解するのではなく、それらを具体化する活動プロセスとしてとらえてゆかねばならない。したがって考察してきたように、マクロからミクロへ、またその逆に循環するプロセスの各段階での局面展開にインターベンション局面は、重大な機能を果すわけである。何といってもインターベンションの焦点は、クライエントとソーシャル・ワーカーとの援助関係を中心としたものである。そしてそのでの特徴を、① クライエント中心的視点、② クライエントの積極的発掘と動機付、③ 弁護的、媒介的、仲介的なソーシャル・ワーカーの機能、④ 個人、問題、状況、社会資源や制度、環境など生活システムへの系統的働きかけ、⑤ サービスの開発、改善向上、⑥ コミュニティぐるみのサービス体制、⑦ ノーマライゼイションの社会的実現などの活動に具体化して求めることができ

るプロセスの中心的局面である。

そして第V局面—評価が、一連の局面展開の最終局面である。まとめ、終結とも表現されるが、機能的には、プロセスとしてのこの局面の成果は、システムを通じて還元し循環してゆくわけで、必ずしも最終局面ではない。局面をどのように分類し、展開するのか、そこでの焦点や目標をどのように設定し、目標達成をどのような方法で追求するのか、比較考察してきた5モデルは、共通点をもちながらも、それぞれ特徴をもっている。これらの局面展開特徴によって、この評価局面の内容も一様ではない。インターベンション展開に力点を置いて、評価や終結に特有の局面展開をあまり期待していない立場<sup>(49)</sup>もあれば、インターベンション技法の終結としてクライエントの変容を評価している立場、<sup>(50)</sup> クライエントの変容成果を問題にしている立場<sup>(51)</sup>など多様である。

前述してきたようにプロセスの局面展開をシステムとして総合的にとらえるとすれば、評価や終結局面を多角的に検討する必要がある。クライエント・システムやプロセス、目標達成や方法の妥当性などを終結に向けて評価<sup>(52)</sup>し、さらに援助プロセスへの中間評価を重ねながら、その効率や効果を測定し、記録や報告を整備し、課題解決に向けて必要な措置と終結を引き出す局面展開のまとめとしての評価<sup>(53)</sup>をしてゆかねばならない。

終りよければすべてよし、短期処遇モデルのように短期間にある結果を引き出す意図的、計画的方法を、そのまま摂取するわけではないが、プロセスの局面展開を通じて意図的、積極的に評価できる結果を引き出し、目標達成という成果を合理的、効果的に可能にしようという局面である。そしてその成果は、再びシステムを通じてフィードバックされ循環してゆく局面である。

この局面で評価される内容は、① クライエント・システムやクライエントの変容、② 問題解決の成果、③ 状況の改善状態、④ インターベンション方法の効果、⑤ インターベンション・プロセスの効率、⑥ クライエントとソーシャル・ワーカーの協同と参加、⑦ サービスや社会資源、⑧ 移送措置を含めた終結結果、⑨ 今後の課題、⑩ オープンエンド終結などとして指摘することができる。

以上プロセスの局面展開の諸特徴を、モデルの比較考察を通じて指摘

をしてみた。

## 5. クライエント・システムのアセスメントと その指標及び因子

システムの構成要因とプロセスの展開、プロセスとしてのクライエント・システム、プロセスの局面展開と考察を進め、続いてクライエント・システムのアセスメント局面に考察の焦点を絞ってゆきたい。

言及してきたように、それぞれの局面は、プロセスとして不可欠な独特の機能を果してきており、その局面に優劣はない。ところで今アセスメント局面に焦点化して考察を進めるにはいくつかの理由がある。それはプロセス研究の大前提でもあるが、(1) 援助過程の最先端 A<sub>1</sub>過程の深化は、クライエント・システムのアセスメントを前提にすること、(2) 実践・政策調整過程は末端 B<sub>1</sub>過程の積上げ、クライエント・システムのアセスメントから出発すること、(3) アセスメントはプロセス展開の初期に取り組み可能な課題であること、(4) 初期段階局面であることから、理論的に一般化された系統的考察が比較的可能であること、(5) アセスメントが実証的概念であるにもかかわらず、具体化された研究がないことなどがそれである。

アセスメントの概念、特性、目標、効果、領域側面などについては、すでに触れてきたところであるので言及はさけるとして、次にクライエント・システムのアセスメント内容の考察を進めたい。そこで動態的なプロセスという時間系列局面としてのアセスメントを、空間系列としてのシステム構成要因で分析をすることになる。

第四表は、その全容である。クライエント・システムそのものの全体像をアセスメントすることから、必ずしも当初から人、問題、状況と分類し、そこに焦点化したアセスメント方法を志向しているわけではない。この点に関しては、唯一の文献ということになるが、サイポーリンのアセスメントのための社会調査 social study<sup>(54)</sup>によると、問題、<sup>(55)</sup> クライエントのパーソナリティ、<sup>(56)</sup> 社会環境<sup>(57)</sup>についての克明なアセスメント概要が、系統的に類型化指摘されている。それぞれ焦点をめぐる固有のアセスメント項目が多彩に列挙されている。しかしシステムとしての総合

的共通理論によって、アセスメント内容が構成されているわけではない。そしてさらにそれは、アセスメント項目の分類類型化に終っており、その内容の抽出や測定への具体的方法を提示するところまで考察は進展していない。しかしあセスメント項目概要を理解するということでは示唆深いものがある。

さてここに提示しているアセスメント構成とその内容は、システムのプロセス分析に用いた構成要因をめぐる共通理論を、そのまま応用してクライエント・システムを分析しようとするものである。そのため個人の生活システムと集団などの組織システムとを同一レベルでとらえ、構造的に構成要因は、共通なものと考え、指標や因子に特徴を付与した構造分析をするところにアセスメントの固有な視点があると考える。しかしその反面ここにシステム構成のもつユニークさが、抽象化された共通理論で十分特徴的に表現されえない問題も指摘できるであろう。そしてシステムのもつ基本構造を共通なものと理解し、構造特性よりも、各システムのもつ特徴がその構造の上に成り立つ機能にあると考える傾向も、また問題にしなければならない点だといえよう。

このように理念的には、批判がないわけでもないが、この懸念に応えるため、各システムの特性に合わせて構成要因を、システムの具体的場面に読み替える必要がある。たとえばクライエント・システムについて、構成要因の I：目標は、生活上の目標として「生活態度」に、II：制度は、「生活規範」に、III：組織は、「社会生活関係」へと読み替えてみることによって、その補足と修正はかなり可能になると考えられる。

さてそこでシステムの構造機能分析の 7 構成要因とクライエント・システムでの読み替え、さらにその機能を考察するための指標を検討してみたい。

## クライエント・システムのアセスメント

第四表

構成 内容	I 目標(生活態度)		II 制度(生活規範)		III 組織(社会生活関係)	
	指標	因 子	指標	因 子	指標	因 子
(1) パ ー ソ ナ リ チ イ ー	① 自主性 ② 明朗性 ③ 協調性 ④ 情緒安定性	被	① 受けた様 ② 礼儀 ③ 生活規律の遵守 ④ 道徳感覚	家	① 家族の雰囲気 ② 家族の相互理解 ③ 家族の協力 ④ 家族のもつ社会資源	
(2) 心 身 の 健 康	① 心理・精神的健康状態 ② 身体的健康状態 ③ 知的機能 ④ 行動上の偏向	信	① 社会志向 ② 偏向性 ③ 互助意識 ④ 宗教性	友	① 友人との雰囲気 ② 友人との相互理解 ③ 友人の協力 ④ 友人のもつ社会資源	
(3) 自 己 意 識	① 人生観の明確さ ② 自己中心性 ③ 自助意識 ④ 自己評価	慣	① 家を中心 ② 日常的生活習慣の尊重 ③ 約束 人情 ④ 伝統的行事への参加	近 隣	① 近隣の人びとの雰囲気 ② 近隣の人びとの相互理解 ③ 近隣の人びとの協力 ④ 近隣のもつ社会資源	
(4) 社 会 意 識	① 社会観の明確さ ② 他者への心づかい ③ 役割意識 ④ 社会参加の度合い	文 化	① 和風志向 ② 保守志向 ③ 現実志向 ④ 普遍志向	職 場 ・ 学 校	① 職場・学校での雰囲気 ② 職場・学校での相互理解 ③ 職場・学校の協力 ④ 職場・学校のもつ社会資源	

ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

構成 内容	Ⅳ方法(課題解決方法)		Ⅴ展開(方法の展開)		Ⅵ機能(実践過程の評価)		Ⅶ財政(生計)	
	指標	因 子	指標	因 子	指標	因 子	指標	因 子
(1) 意欲	意	① 意欲の強さ	問題の認知	① 問題認識の有無	自己理解	① 収入の程度	収入状況	① 収入の程度 ② 収入増の可能性 ③ 収入の安定性 ④ 収入への満足度
		② 意欲の妥当性		② 問題認識の強さ	環境理解			
		③ 意欲の表現方法の有効性		③ 問題認識の妥当性	問題の理解			
		④ 意欲の具体化		④ 対応策の有無	自己成長の自覚			
(2) 人的資源	人	① 人的資源の有無	課題の設定	① 課題意識の自覚	主体性の自覚	① 生計の困難性	支出状況	① 生計の困難性 ② 支出上の余裕 ③ 支出の計画性 ④ ローン志向性
		② 人的資源による援助の有効性		② 設定課題の妥当性	自助意識の程度			
		③ 人的資源の協同		③ 課題解決への努力	自助活動の展開			
		④ 人的資源活用・開発の可能性		④ 課題解決の可能性	ソーシャル・ワーカー援助活動の理解			
(3) その他の人的資源	そ	① 家族などその他の人的資源による援助の有無	ソーシャル・ワーカーの活動	① ソーシャル・ワーカーへの接近意欲	課題解決意欲	① 金銭感覚	経済感覚	① 金銭感覚 ② 浪費性 ③ 物品の消費傾向 ④ 経済生活の見通し
		② その援助の有効性		② ソーシャル・ワーカーへの依存性	課題解決方法の妥当性			
		③ その他の人的資源の協同		③ ソーシャル・ワーカーの役割理解	課題解決活動の程度			
		④ 今後の援助活用への可能性		④ プロセス展開への主導性	課題解決と自己実現			
(4) その他の社会資源	そ	① 社会資源の有無	その他の社会資源の活用	① 社会資源の活用意欲	社会資源ネットワークの有無	① 動・不動産・貯蓄の有無	動・不動産・貯蓄	① 動・不動産・貯蓄の有無 ② 借財の有無 ③ 動・不動産活用の可能性 ④ 動・不動産・貯蓄観
		② その有効性		② 社会資源への依存性	社会資源ネットワークの妥当性			
		③ 社会資源の動員		③ 社会資源の可能性や限界の理解	社会資源ネットワークの有効性			
		④ 社会資源開発の可能性		④ 社会資源活用からの問題解決	社会資源ネットワークの理解と開発			

I : 目標 <生活態度>

- (1) パーソナリティ (2) 心身の健康
- (3) 自己意識 (4) 社会意識

II : 制度 <生活規範>

- (1) 習慣 (2) 信条
- (3) 慣習 (4) 文化

III : 組織 <社会生活関係>

- (1) 家族 (2) 信条
- (3) 近隣 (4) 職場・学校等

IV : 方法 <課題解決方法>

- (1) 意欲 (2) 人的資源としてのソーシャル・ワーカー
- (3) その他の人的資源 (4) その他の社会資源

V : 展開 <方法の展開>

- (1) 問題の認識 (2) 課題の設定と解決
- (3) ソーシャル・ワーカーの活用 (4) その他の社会資源の活用

VI : 機能 <実践過程の評価>

- (1) クライエントの変容 (2) 自助機能
- (3) 課題解決機能 (4) 社会資源の活用

VII : 財政 <生計>

- (1) 収入状況 (2) 支出状況
- (3) 経済感覚 (4) 動・不動産・貯蓄

以上のような構成要因とその指標から、クライエント・システムの構造の概要をとらえることが可能であるし、指標の特徴を把握するための因子から、システム構造のもつ機能を理解することができる。指標については、その前提になる構成要因の特性をもっともよく表現する視点や側面を精選し、整理統合して 4 点に分類、その配列については、ミクロ→マクロ、主観的→客観的、個人的→社会的、具体的→抽象的なものへ、(1)・(2)・(3)・(4) と分類整備してきた。さらに因子についても、指標を特徴的に表示でき、しかもアセスメント可能な焦点を厳選して計上した。またその配列についても、指標配列と同様の考慮を払ってきたつもりである。

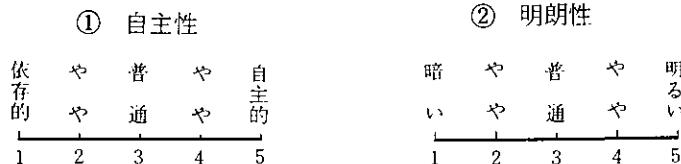
そこでこの「アセスメント概要」を実践場面でどのように活用するこ

とが可能か、これが次の課題である。アセスメントの意義や方法を理論的に解説している文献は少なくない。しかし問題は、それをどのように具体化するかということである。その手順や方法は、次のように展開することが可能である。

まずアセスメントのデータ収集を、I：目標〈生活態度〉の中の指標(1)：パーソナリティについて考察してみると、因子をそれぞれスケール化して、ソーシャル・ワーカーの判断に基づいて測定をする。指標とはいえ、絶対化した価値基準で判断するのではなく、たとえば収入状況についても、その家族の生活状態から多少を判断することになる。

#### I：目標〈生活態度〉

##### (1) パーソナリティ



##### (3) 協調性

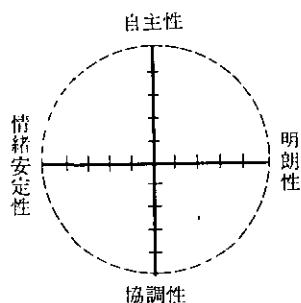


すでに述べてきたように、アセスメントとは、ある事象の生成過程、要因の構成状態、システム理解への情報提供を目指した認識過程であることから、スケール化された情報を次のようにレーダーチャートに表示して、その全体像、各因子のバランス、さらに初期、中期、後期とアセスメントを継続し、その変容を可視的、具体的に理解することができると同時に、プランニングからインターベンションへのプロセスに適切なデータを提供することが可能である。

第二図は、指標の因子チャートである。各指標とその因子との関係を詳説するのは、実証研究の機会にゆづるとして、一例だけパーソナリテ

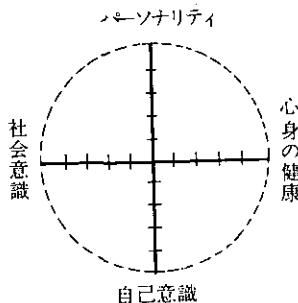
イ指標について触れておきたい。パーソナリティ特性を把握するテストや研究はかなりあるにもかかわらず、ここでパーソナリティ特性を、4因子側面から分析することの意味は、課題解決の主体者であるクライエントの行動特性をパーソナリティの側面から把握しようとするためであり、実践に役立つクライエントのパーソナリティ特徴の理解に目標があるからである。したがってパーソナリティの類型学やパーソナリティそのものを研究することが目的ではない。この4因子から実践的パーソナリティの特徴を理解し、それを総合して、目標としての生活態度を構成する指標に組み込んだものが、第三図の指標チャートである。この各指標は、それを構成する因子の統合の上に成り立っているのである。

パーソナリティ指標の因子チャート



第二図

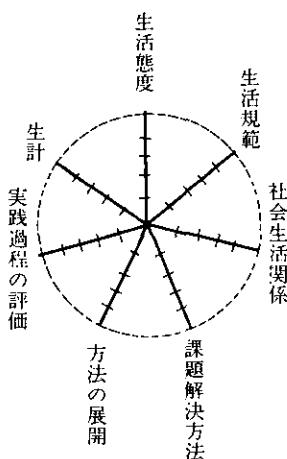
生活態度の指標チャート



第三図

第四図は、各指標群に支えられる構成要因の特徴を、要因別に統合し、比較できるように表示したものである。これらを通じてクライエント・システムの全体像が把握できるし、実践プロセスの流れの中で時間的経過をおいたアセスメントを実施することにより、変容の評価とプランニングやインターベンションへの貴重な生態的データをえることができる。

クライエント・システムの構成要因チャート



第四図

6. おわりに

いつものことながら実証研究を意図しながらも、それの伴わない論述にもどかしさを感じる。今回で一応クライエント・システムについての概要とプロセス概念の解説、アセスメント方法の理論的仮説の提示を終えたことになる。特にアセスメントをめぐって、人、問題、状況などについて焦点化されたサイポーリンの方法などと異なり、クライエント・システムの全体像を理論的に考察をしてきたことになる。そこでこのアセスメント手法を用いて、サイポーリンらが焦点化している実践的課題に、どのように対応できるのか、それはアセスメント方法の妥当性を裏付けることでもある。この課題に対しては、アセスメント過程でえられる膨大なデータ処理を、プログラムしたコンピューターを活用して、人、問題、状況をシステムとしてアセスメントすることが容易にできる。つまり測定された指標や因子を、目的とするシステムに構成要因として機能させるように、コンピューターをプログラムすることである。

あらゆる領域で情報処理が、OA技術を用いて進められるようになつた。本研究も例外ではない。しかし詳細な情報をプログラムを通じて処理するということは、実践活動の内容をOA技術によってコントロールすることではない。ソーシャル・ワーカーの専門的判断と活動の目的に合せて十分整備されデータや情報が提供されるのであって、それをどのように活用し、クライエント援助を可能にするのかは、ソーシャル・ワーカー自身の活動そのものにかかっていることはいうまでもない。

これから課題は、このアセスメント概要を用いたデータ処理システムの確立と、実証研究、さらに次にくる実践活動システムの分析ということになる。

### 注

- (1) 拙稿、「ソーシャル・ワーク論講義録」、1983年、7頁。
- (2) 同講義録、8—10頁。
- (3) 拙論、「ソーシャル・ワーク実践システムとプロセス展開」、北星論集、第20号、1982年。
- (4) 同論文、17頁。
- (5) 同論文、23—28頁。
- (6) 上記の他に  
第18回日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会全国大会報告集、「ソーシャル・ワーク実践過程の再考」、昭和58年。  
日本社会福祉学会 第27回大会、研究報告その1、「ソーシャル・ワークにおけるアセスメントの課題」、1979年。  
同学会 第28回大会、研究報告その2、「ソーシャル・ワークにおけるアセスメント過程の研究」、1980年。  
同学会 第29回大会、研究報告その3、「ソーシャル・ワーク実践過程の研究—特にプランニング過程の検討をめぐって—」、1981年。  
同学会 第30回大会、研究報告その4、「ソーシャル・ワーク実践過程の分析とそのシステム」、1982年。  
同学会 第31回大会、研究報告その5、「ソーシャル・ワーク実践システムとプロセスの局面展開—特にクライエント・システムのアセスメント—」、1983年。
- (7) 前掲論文、23—28頁。
- (8) M. Siporin, *Introduction to Social Work Practice*, 1975.

ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント

- (9) A. Pincus and A. Minahan, *Social Work Practice : Model and Method*, 1973.
- (10) B. R. Compton and B. Galaway, *Social Work Processes*, 1975.
- (11) F. M. Loewenberg, *Fundamentals of Social Intervention*, 1977.
- (12) H. S. Strean, *Clinical Social Work*, 1978.
- (13) 前掲論文, 4—5頁。
- (14) M. Siporin, *op. cit.*, pp. 195-197.
- (15) *Ibid.*, pp. 198-201.
- (16) *Ibid.*, pp. 202-206.
- (17) *Ibid.*, pp. 206-208.
- (18) *Ibid.*, pp. 208-212.
- (19) *Ibid.*, pp. 212-216.
- (20) A. Pincus and A. Minahan, *op. cit.*, pp. 101ff. and 117ff.
- (21) F. M. Loewenberg, *op. cit.*, pp. 24-25.
- (22) A. Pincus and A. Minahan, *op. cit.*, p. 98.
- (23) H. S. Strean, *op. cit.*, pp. 77ff.
- (24) M. Siporin, *op. cit.*, p. 227.
- (25) *Ibid.*, p. 231.
- (26) *Ibid.*, p. 241.
- (27) *Ibid.*, pp. 369ff.
- (28) B. R. Compton and B. Galaway, *op. cit.*, p. 242.
- (29) 前掲論文, 13—14頁。
- (30) 同論文, 13頁。
- (31) H. S. Strean, *op. cit.*, pp. 133ff.
- (32) B. R. Compton and B. Galaway, *op. cit.*, pp. 252-253.
- (33) *Ibid.*, p. 252.
- (34) M. Siporin, *op. cit.*, p. 251.
- (35) *Ibid.*, p. 255.
- (36) *Ibid.*, pp. 257ff.
- (37) *Ibid.*, pp. 263ff. and 278ff.
- (38) 前掲論文, 14頁。
- (39) 同論文, 15頁。
- (40) 同論文, 15頁。
- (41) F. M. Loewenberg, *op. cit.*, p. 7.
- (42) M. Siporin, *op. cit.*, p. 289.

北 星 論 集(文) 第 21 号

- (43) A. Pincus and A. Minahan, *op. cit.*, pp. 141ff., 163ff. and 195ff.
- (44) F. M. Loewenberg, *op. cit.*, pp. 26-27.
- (45) B. R. Compton and B. Galaway, *op. cit.*, pp. 253 and 339ff.
- (46) H. S. Streat, *op. cit.*, p. 222.
- (47) M. Siporin, *op. cit.*, pp. 302-310.
- (48) *Ibid.*, pp. 315ff.
- (49) F. M. Loewenberg, *op. cit.*, pp. 27-28.
- (50) H. S. Streat, *op. cit.*, pp. 224ff.
- (51) A. Pincus and A. Minahan, *op. cit.*, pp. 272-285.
- (52) B. R. Compton and B. Galaway, *op. cit.*, p. 253.
- (53) M. Siporin, *op. cit.*, pp. 326ff.
- (54) *Ibid.*, pp. 369ff.
- (55) *Ibid.*, pp. 370-371.
- (56) *Ibid.*, pp. 371-374.
- (57) *Ibid.*, pp. 374-377.

## Process of Social Work Practice and its Assessment

Yoshihiro OHTA

The purpose of this paper is to establish the study of developing processes in social work practice provided with a basic set of concepts and principles for a firm foundation of general practice knowledge. Process may be defined as a series of actions, changes, or functions that bring about an end or result. It is still quite difficult to examine it, because well developed theories and methods to approach it were not established yet. This article describes and analyzes the elements of practice systems and processes. Focusing on the assessment stage of developing processes this time, it presents assessing elements, indicators and factors relating to a client system and explains how to promote the assessment method.

Contents are the following:

- 1 introduction
- 2 structuring factors of system and developing process
- 3 developing process and client system
- 4 developing stages of process
- 5 assessment of client system
- 6 summary